

ポスター番号16【実践発表】

外国人散在地域での「日本語指導ワークショップ」の試み

當房 詠子 (梅光学院大学・非常勤講師)
平田 歩 (梅光学院大学・准教授)

① 下関市での支援の現況



② 実践現場の課題と目標

- 日本語支援が不十分
- 子どもたちの不安や困難な状況が見逃がされている
- 担任一人では指導できない
- 日本語指導員の増員の実現は難しい

- ◎学校現場での日本語教育への理解が必要
- ◎日本語指導の方法・情報の共有
- ◎理解が広まることで、地域での支援も可能

児童生徒、保護者との接し方、日本語指導法の学べる場を！

③ 実践の方法

「日本語ワークショップ」の実施

時期：8月8日、9日、10日、22日、23日(5日間)
対象：小中学校教員、地域ボランティア、保護者等
場所：梅光学院大学
(※市内で唯一の日本語教員養成課程あり)
参加費：無料
◆児童生徒対象「夏休み日本語教室」も実施、見学可。
◆募集には市教育委員会の協力が得られた。

④ 一日の活動の流れ

	児童生徒対象(参加者:3名)	大人対象
9:00 ~ 12:00	「夏休み日本語教室」 ・小1男子/小5女子/中3男子 ・日本語の学習(教員2名が指導) ・夏休みの宿題 (学生ボランティア8名が協力)	「教室」の自由見学
13:00 ~ 15:00	「夏休み日本語教室」 ・日本の遊び、読み聞かせ、図画などの自由課題 (学生ボランティア8名が協力)	「日本語指導ワークショップ」 ・一部、「教室」の活動に参加

⑤「日本語指導ワークショップ」第1回

①受け入れと初期指導

⑥「日本語指導ワークショップ」第2回

②やさしい日本語とは

⑦「日本語指導ワークショップ」第3回

③学習に必要な日本語指導

⑧「日本語指導ワークショップ」第4回

④国語教育と日本語教育

⑨「日本語指導ワークショップ」第5回

⑤効果的な指導法を考える

⑩ 参加者アンケートから

◆参加者：10名(うち4名が小中学校教員)

- どんなところで困難さを感じるか体験でき、考えることもでき、よかった。
- 「鬼退治」=「鬼とたたかう」新鮮な表現だった。
- 指導する側は、学習者の疑問に対して答えを持っていないと感じた。
- 「国語力」が強いが「日本語教育」の指導は難しいと感じた。何気なく使っている言葉の使い方を説明されたら説明できるか…大変有意義だった。

◎非常に参考になった。ぜひまた系統的に学びたい。
◎全部受けなかった。また次の機会があると嬉しい。
◎市内で定期的(1年1〜2回)あればいいと思う。
◎気軽に指導者同士で話せる場がほしい。

⑪ 成果と考察

◎子どもたちにやさしい日本語を使って話すなど、普段使っている日本語を言い換える難しさを体験し、何が「やさしい」のかに気づいたことなど、効果的に体験できた内容が好評であった。

◎アンケートでは「少し難しかった」という声もあり、興味を持つだけでは不十分だった日本語や日本語教育についての「学び」が必要であることがわかった。

◎半年後の2017年2月には、このときの参加者のうちの有志による「下関子どもの日本語教育支援研究会」を発足させた。本研究会での活動を基に今後ボランティアや指導者が増えることで、市内の学校への日本語支援を充実させていきたい。